

Close-up Interview

パーフェクトアクター

村田雄浩さん(俳優)

「桑田さんのライブ会場にいるような雰囲気の中に一緒に立たせてもらった幸福感と緊張感……。」

60フィートのレーンがとても美しく見えました(笑)」



「KUWATA CUP 2019」決勝大会に桑田佳祐氏の助っ人パートナーとして登場し、女子プロチームとのエキシビジョンマッチで観客を大いに沸かせたベテラン俳優の村田雄浩さん。芸能界きってのボウリング愛好家として知られ、JPBAから名誉プロ第1号に認定された凄腕ボウラーだが、内に秘めた「ボウリング愛」もまた、桑田さんに負けず劣らず熱く、そして揺るぎない。

スポーツボウリングは自分の性に合っている

——70年代のブームのころ、村田さんはまだ小学生だったと思いますが、初めてボウリングをしたのはそのころでしょうか。

村田 そうですね。小学校2年か3年の低学年のときでした。親父がボウリング好きで、よく一緒に連れて行かれて投げていました。当時はスコアが手書きだったから、算数はボウリング場で覚えました(笑)。

——本格的に投げ始めたのは?

村田 初めてマイボールを持ったのは20代の半ばです。中学、高校時代は部活で柔道やラグビーをやっていた、役者をやり始めてからもずっと投げる機会はなかったんですが、あるとき仲間と飲んだ勢いで投げに行ったら「やっぱりボウリングはスポーツとしてキチンと取り組んだほうが面白いんじゃないか?」と思ったのがきっかけです。そのときの仲間、ボウリングにハマったのは私一人でしたが(苦笑)。

——マイボールで投げるボウリングは、やはり違いましたか?

村田 全然違いました。ボールは曲がるし、コントロールがしやすくストライクもよく出るようになりましたから。気がつくと、役者仲間や事務所のマネージャーさんのなかにもボウリング好きがいて、週1回チー

ムみたいに集まって一緒に練習しようということになってから、どんどん上達していった感じですね。

——なるほど。

村田 でも、センターや地区の大会などに出て行くと、もっと凄い人たちがアマチュアのなかにもいるわけです。そういう人たちのボウリングを見たり「本場はアメリカらしいぞ」と、向こうの選手のDVDを買ってコマ送りで見たりしながら(笑)、さらに研究するようになりました。ちゃんとしたコーチが付いたことはないんですけどね。

——独学であれだけの腕前になるとは! 何でも好きで始めたことにはのめり込む性格では?

村田 というより、これだけ続けているのは、ボウリングというスポーツが自分の性に合っているんでしょうね。ゴルフや釣りなどの趣味に比べたら、いろいろな意味でリーズナブルでもあるし(笑)。

——普段はどこのセンターで投げているのですか?

村田 世田谷のオークラボウルです。以前は矢島(純一プロ・1期)さんがいて、いろいろ教えていただきました。今もお付き合いさせてもらっていますが、本当に凄い方ですね。ほんの一言二言のアドバイスでも、聞けば必ず「目からウロコ」ですから(笑)。

——どれくらいのペースで投げ込んでいるのですか?

村田 9時5時で終わる仕事ではないし、地方に行くことも多いので、なかなか…。常にボールを持って行動するわけにもいきませんから(苦笑)。週に2~3回、1日5~6G投げられれば御の字といったところです。

——2012年には夢の300点も達成されています。

村田 ええ。でもそれは練習中

のことで、大会の緊張感の中で出したわけではないんです。一投一投、レーンの変化を読んでラインを変えたり、ボールを替えたりすることに集中して、スコアに意識がなかったのがよかったんでしょう。センターもガラガラだったし(笑)。それ以前にも何度か達成のチャンスはあって、初めて11連発がきたときは、リーグ戦でセンターが満員。で、最後の一投前にみんなが一斉にアプローチを下りたのに気づいて、ガチガチになってしまっ…。結果はノーヘッドの3本残しで297でした(苦笑)。



「KUWATA CUP」での村田さん

お客さんを楽しませることはプロスポーツとして当然

——「KUWATA CUP」で競演した桑田さんは、普段からボウリング仲間なのですか?

村田 いえ。年末にテレビ東京の特番で一緒にするまで、直接の面識はありませんでした。以前にも共通の知人から「桑田さんが一緒に投げたいといっている」という話があって、光栄に思っ

ていたんですが、お互いなかなか時間の都合がつかなくて…。特番の話がきたときは舞台に出演してまったく投げていなかったけど、このチャンスを逃すまいと、公演

が終わってから必死に練習しました。あの桑田佳祐とボウリング番組で共演できるなんて、滅多にあることじゃないですからね(笑)。

——そのときは対戦して、村田さんが勝ったんですね。

村田 ダブルスの2Gマッチで、ペアを組んだ宮城鈴奈プロ(42期)の活躍のお陰です。自分と桑田さんのスコアは、1G目は自分が勝って2G目は桑田さんの勝ち。でもトータルでは自分が負けているんですよ(苦笑)。で、そのときに「今度は一緒に組もうぜ!」「それも面白い!」となって「KUWATA CUP」につながるわけです。

——姫路麗(33期)&名和秋(35期)の女子プロチームとのエキシビジョンマッチは、観客を大いに沸かせました。

村田 お二人ともいい意味でタレント性があるというか、公式戦とは違ったカタチで会場を盛り上げようとしていましたね。どういう流れのゲームにしたら観ているお客さんは面白いのかを考えながら投げているように感じました(笑)。

——特設レーンで投げたのは初めてですか?

村田 テレビ局のスタジオとか「P★LEAGUE」のDVD企画で何回か投げた経験があるので、さほど違和感はなかったんですが、レーンの両サイドを300人ずつびっしり埋めた観客の大半は桑田さんのファンでしたからね。まるで桑田さんのライブ会場にいるような雰囲気、そのなかに一緒に立たせてもらっているという幸福感と緊張感がたまらなかったですし、ファウルラインからピンまでの

60フィートのレーンがとても美しく見えました(笑)。

——「KUWATA CUP」は、いわゆる競技ボウラーではない一般のボウリングファンにも門戸を開放したり、決勝大会ではプロの優勝決定戦時にもテレビの実況MCをオンのままにして「観客ファースト」の演出を徹底したりと、あらゆる面で画期的な大会でした。

村田 ショーアップしてお客さんを楽しませるのはプロスポーツとして当然のことだから、実況音をそのまま会場に流すのはアリだと思いますね。本来、ボウラーは静かな雰囲気の中で投球に集中したいものですが、プロならああいう賑やかな雰囲気の中で投げることに慣れていく必要があるでしょう。

——プロ野球の選手なんて、もっと騒々しい応援の中でプレーしていますね。

村田 ひどい野次だって飛んでくるし(笑)。でも、それもあつてのスポーツ文化だと思うし、プロスポーツの楽しさなんだと思いますね。

——決勝大会のお客さんは、選手がアドレスに入ると自然と音を立てるのをやめて、静かに投球を見守っていました。

村田 そうしたマナーやルールはあらかじめ周知もできるし、例えばレーンコンディションの変化とか、ボウリングという競技の奥深さを伝えていけば、お客さんはもっと楽しめると思います。最初はよく分からないマニアックな実況に聞こえても「あれはどういう意味だろう?」と興味がいいたら、自分で調べてハマっていくのが人間ですから(笑)。



むらた・たけひろ/1960年3月18日、東京都生まれの埼玉県育ち。16歳の時に「劇団ひまわり」に入団し、俳優としてのキャリアをスタート。以来個性的な俳優として数多くの舞台、映画、TVドラマに出演し、92年には「ミンボーの女」(伊丹十三監督)「おこげ」(中島文博監督)の演技によって、各映画賞の助演男優賞を総ナメにした。凄腕のボウリング愛好家としても知られ、2014年にはJPBAが「名誉プロ第1号」に認定した。180cm、右投げ。ベストスコアは300(12年達成)。現在、ボウラーとして席を置く「Gボウラーズ」(芸能人のボウリングサークル)でのキャッチフレーズはズバリ「パーフェクトアクター」だ。

【近日放送予定のTV出演作】

- 4月14日(日)21:00~「アガサ・クリスティ予告殺人」(テレビ朝日系)
- 5月7日(火)25:28~「都立水商~令和~」(TBS系連続)
- 5月8日(水)7:00~「世界一周魅惑の鉄道旅行」(BS-TBS)
- 5月10日(金)20:00~「大富豪同心」(BSプレミアム連続ドラマ)